

寸庭

いのちのゆくえ

小野鉄太郎(聴風館造園研究所)

コンセプト

今世紀の重要な課題は「生命とは何か?」、「生命はどうなるのか?」という事です。人のみで無くても鳥や虫や草木等全ての「いのち」を深く考えて、私達の為すべき事に気付かねばなりません。この課題を古瓦と苔や卵形の石を使って表現しました。

内容について

旧来つくられてきた、伝統的な日本庭園は工事や管理の費用もかかる事だけでなく、自然環境の悪化はいうまでもなく、日本人の生活様式の変化や価値観の多様性等の原因により、最近特に日本庭園をつくらなくなってきました。その一つの原因は、日本庭園の鑑



さまざまな命を考えさせてくれるものだ

賞が難しいと思われる事もあります。これからの庭はやさしくて、わかりやすいものでなければなりません。特に京庭の伝統が一般の庭の愛好家の要望と調和しなくなっているように思える処もあるようです。

旧来の日本庭園はあまりに真面目になり過ぎたようです。伝統的な様式美の庭が敬遠され、最近自然風な「憩い」、「やすらぎ」、「いやし」等の自然と触れ合う空間の創造が主流です。しかし、これからはもっと「遊び」の要素のある庭も必要だと思います。何故ならば、人は好きな遊びをするときに最も人間らしく成ることが出来るからです。

近年流行のガーデンニングも庭師のお仕着せ

でなく、施主が自分の好みに自らつくって遊ぶ要素が多いので好まれるのです。それでは私達の庭師は、今後日本庭園をどのようにすれば、一般の方に気に入られる庭をつくる事が出来るかと考えました。今回は庭石や燈籠を使わず、高価な植木等も使わずに考えてみました。

テーマは今世紀は「命」の時代といわれているので「命の行方」としました。これから将来、地球はどうなるのか? 鳥や虫の命は大丈夫なのか? 遺伝子まで改造していいの? 命とは何なの? 命の尊さや愛らしさと、命の神秘さ、そして先行きの不安感を暗示させるような各種の表現を、遊び心で表現してみました。

材料は廃品の古瓦と四種類の苔(ホソバシラゴケ、スナゴケ、スギゴケ、シノブゴケ)や白川砂、木炭(黒く汚染した川の表現のために使用)等で高価な物は使用してません。また土中に埋めるだけで技術的にも高度でないのだから素人でも出来ます。この様なちよつとした工夫で出来る庭を当社は「寸庭」と称しております。木炭を色彩として用いると同時に炭は木の命の生かし方なのです。木炭を土に埋めると、草木が良くなります。古瓦は土を焼いたものです。土に埋めるとすぐに土になじみ、そこはかとなく、苔の香がしてきます。

少し苦労したことは、命をイメージする様な卵形の石を三個程探ために手間がかかった事です。丸いボールの様な石はかなりあっても形が卵形の石はなかなか無いものです。しかし、海岸で遊びながら見つけて来ましたので楽しくもありました。

工夫したのは、最近流行の苔玉(当社は苔珠という)を地球に見立て石の舟に乗せて渦

巻く濁流に流される表現です。この苔珠の石舟を展示公園の入口から見える高さに据えてから、瓦で渦巻きの表現をした事です。瓦の渦はこの庭の近くに於て始めて見えます。そして直径三〇センチ程の苔珠は石舟に溜まった雨水が毛管現象で水を吸い上げる様に工夫してあります。

植木屋は生きた植木を扱うものですが、あえて枯れた切り株にモミジの若木を添えて渦巻きの中に植えました。生と死の対比の表現です。

花は和物でキキョウ、シユウメイギク、ハシゲシヨウ、ハナシヨウブ、ミヤコワスレ等を一本植えにして瓦で囲うシンプルな生け花の様なセンスで並べました。盛り沢山な洋風ガーデンニングとは趣を変えました。これなら花が終われば植え替えも簡単です。また新たに、白砂の処に瓦で囲み草花を植えて変化をも楽しめます。瓦の並べ方も時々変えてみる、様子が随分変わります。少しの変更なら簡単です。庭づくりで遊ぶ事が出来ます。

今回は私にとつては始めての出展作品になりますので、所長の父が自分の思う様にやってみるといつてくれましたので、先輩の所員に助けてもらいながら施工しました。大変良い経験になったと思います。

私の父(所長小野陽太郎)は常々、私に京庭の伝統とは、技法ではなく、工夫する心だといっております。また、京庭師の心は、伝統の中から真に生きたものを創造する精神だともいっております。

今回の経験で未熟ながらも、私なりに創意工夫して日本庭園を現代の生活の中に生かす努力をしたいと思えます。また今後も人々の楽しめる様な「寸庭」をつくりたいと思えました。

(小野鉄太郎記)